

新しい年のスタートにあたり謹んでごあいさつを申し上げます。
旧年中のご厚誼に心よりお礼を申し上げます。

経済産業省の外郭団体に「独立行政法人・中小企業基盤整備機構」（旧中小企業総合事業団）があります。北海道、東北、北陸、関東、中部、近畿、中国（支部：広島市）、四国、九州と九支部があり、中小企業が抱えるあらゆる悩みや課題の解決を実践的に支援してくれる組織です。

日本の企業の九九％が中小企業。バブル経済の崩壊や中国の台頭、相次ぐ金融機関の破綻などで、中小企業の環境はこの十年で激変しました。どの企業も新しい時代に適応するために、外部からは想像もつかない必死の努力を続けています。

昨年夏までの一年間、この「中小企業基盤整備機構・ベンチャー総合支援センター」から財務計画や経営計画の専門家を私の会社へ指導のために派遣して頂きました。いわば中小企業の家教師です。この機構は国費で賄われていますから授業料も驚くほど低額。いたれりつくせりの制度です。

家庭教師の先生は大谷幸三先生（六三歳）。一年間毎月二回、パソコンと資料の大荷物を抱えた大谷先生はいつも定刻前に私の会社の扉をノックされました。

大谷先生は大手自動車メーカー(株)マツダへ入社後、財務本部長を最後に退職されるまで、一貫して財務を中心とした経営計画の立案と実施に携わってこられました。現役時代は千億円単位の資金を左右する立場におられた方ですが、「百万円も一十億円も理屈は同じですよ」と笑顔で話される頼もしい先生です。

社員と一緒に手とり足とり受けた月二回の実践的な授業は、まさに「眼からウロコが落ちる」思いの連続。勉強不足を恥じ入るばかり、自信喪失にも陥った一年間でした。

経営者は歓喜の絶頂と落胆の谷を常にさまよい、大小さまざまな不安をすっしりと背に負う存在ですが、家庭教師、大谷先生の研修を通じて自分なりにひとつ思い至ったことがあります。

それは特別なことではありません。『不安や迷い』のほとんどは正確な知識の不足や情報の不足、冷静な自己（自社）分析の不足から生まれるもの。そして、それらを克服するためには、まず自分で頭のなかに渦巻く懸案を整理してみることに。そうすればおのずと活路は開かれてくること。

大谷幸三先生のご生家は鳥取県・三朝温泉の旅館業。高校卒業後、いったんは 航空自衛隊幹部候補生学校に入学されたものの、視力検査で不合格となってやむなくパイロットへの道を断念。あらためて大学へ入り直した、という曲折の経歴をお持ちの方です。

生家が商家ということもあって、小企業の厳しさを肌で知っておられるに加え、きつと「拳手、敬礼っ！」がお似合いだろう、青年将校のように清廉、篤実なお人柄の先生です。

ある日の大谷先生からのメールから。

「 経営者や社員の皆さんとともに悩み、ともに考え、とにかくやってみることを信条にしています。指導先を訪問する楽しみは、各社の経営者の方から多彩な経験に裏打ちされた考え方、人生の取り組み、思想、哲学、知恵や趣味などをお聞きし、価値ある勉強をさせていただくことです。どうやら私が指導や教育を受けることの方が多ようです。」

同じく「ベンチャー総合支援センター」で工業分野の新技术の開発や特許関連のアドバイザーを務めておられる神保正先生（六三歳）。

金沢大学工学部を卒業後、日立製作所に入社。現役時代は主に発電所や発電施設の仕事に携わって

こられました。とりわけ水力発電所の建設ではカナダ、アメリカ、チリ、パキスタンなど外国での仕事が多かったですとのこと。

「日立関連会社を経て定年退職してのち、アドバイザーとして中小企業のお手伝いを始めてまず驚いたことは、中小企業のスピード感とバイタリティです。『日立』という看板に頼り切り、限られた領域にいた私はこれには大変なショックを受けました。自分がいかに大企業の狭い庭のなかでしか通用しない価値観で物事にあたってきたか、ということを思い知らされました。企業のお手伝いをするにあたっては、大企業的な発想をまず自分から排除しなくてはならない、そうしなければ中小企業者の理解も得られないし成果もあがらない、と考えました。これは自分にとって大変な努力を要することでした。この、やりがいのある素晴らしい仕事をこれからも続けさせて頂きたいと思っていますが、もし将来、仕事から解放されることがあつたら、現役時代に私が建設に携わったパキスタンの水力発電所を妻とともに訪れてみたいと思っています。なにしろ辺鄙なところですから妻は嫌がるかもしれませんが、シルクロードにも近い、とてもいいところなんです。その日がやってくることを楽しみに今は精一杯、中小企業、零細企業の皆さんと一緒に汗をかいています。」

人生の前編の仕事を終えられ、中小企業の応援団として人生後編の仕事に取り組んでおられる方々との交流のなかで、私は七年前訪れたイタリア中部、アンツィオの町にある「アンツィオ上陸記念博物館」のことを思い出していました。

（詳細「おじさんの青春日記 その2 合衆国陸軍軍曹 マスタカズオ」）

この壮麗な博物館は第二次世界大戦の終盤、ノルマンジーと並び称せられるほど、枢軸国と連合国が血を血で洗う激烈な戦いを繰り広げた、地中海に面した美しい町にあります。「アンツィオ上陸記念博物館」にはこの戦いの遺品や資料がスタッフによって見事に整理されて保存、展示されています。

特筆すべきはこの博物館はP・コランツィオーノ館長以下、町に住む定年退職者が中心になって全員ボランティアによって運営されていること。人生で仕事のひと区切りを成し終えた人たちが、実に楽しそうに生き生きとこの博物館の運営にあたっておられます。

人生の定年は誰が決めるのではなく、自身の情熱と尽きない夢が決める、ということ。「中小企業基盤整備機構」、「アンツィオ上陸記念博物館」、二つの団体のスタッフを通じて感じました。

*

私の母は「阪神淡路大震災」の年、平成七年（一九九五年）三月、八六歳で永眠しました。今年三月で満十年の年忌を迎えます。

母が亡くなるひと月前のある週末のこと。大震災の救援ボランティアとして神戸市の小学校へ出かける私や息子、大勢の仲間たちを見送るために母は病床からよろよろと這い出てきました。

「体に気をつけて、がんばってきてね。私の分まで精一杯働いてきてちょうだい」と、まるで戦時の出征兵士を見送るように激励してくれたことを今も憶えています。

長い間、経営者としての生活を送った母は八十歳を過ぎても、私が居宅の母を訪ねて声をかけると、開口一番、

「公定歩合、どうなると思っ？」

と返事を戻すような人でした。

父の看病、そして父の死、事業の継承、と事件が続く、幼い頃の私の記憶に残るのは、いつも気ぜわしく働き続ける母の姿です。

多忙な母に代わって、少年の私を慈しんでくれたのは三人の姉たちでした。
私には四人の母がいると思っています。

私が学校を卒業して母の経営する工場へ入ってしばらくしてのち、仕事をめくって母と意見が衝突することが続きました。ついには下克上のように、私は母を代表者の座から逐（お）いました。

斜陽の業界にあつて新参若造の采配が成功するはずもなく、母はそんな私を遠巻きに見ていたようです。母は親であると同時に、私にとってライバルのような不思議な関係がしばらく続きました。

*

昨年暮れ、ある忘年会で仲間から川辺浩さん（六五歳）という方を紹介されました。若い頃は映画館で封切される新作映画の大看板を何十枚も手描きで描くという仕事をされていた方です。オードリー・ヘプバーン、エリザベス・テーラー、イングリッド・バーグマン、グレゴリー・ペック、ハンフリー・ボガード 胸おどるスクリーンの名優たちの肖像をその手で嘗々と描き続けた方です。

昔話が続く酒席で、彼はふと思いついたように訥々と広島原爆にまつわる話を始めました。

「 当時五歳だった僕は、原子爆弾が落とされたあの日のことを、なぜかはつきりと憶えとるんです。あの日ねえ、僕はおじいちゃんとおふくろに連れられて井の口（現・広島市西区）の海岸におつたんです。真つ青に晴れ渡つた空のなかを、海のむこうに真つ白い落下傘が落ちていくのをこの眼で見たんです。そして、雷が百もいっぺんに光つたような閃光と、すさまじい爆風。気がついたとき、僕は防空壕のなかにおりました。

僕の家近所に『さと子さん』という二十歳前のおねえさんが住んでいました。僕を弟のように可愛がってくれたおねえさんです。いま思えば、幼い僕の初恋の人だったのかもしれんと思つたります。さと子さんはひどい近眼で、いつも牛乳瓶の底のようなぶ厚いレンズで、丸い縁の眼鏡をかけていました。『新型爆弾』が広島に落ちて数日してから、広島市内の会社に勤めていた、さと子さんがお父さんの牽く大八車に乗って帰ってきました。体を覆う布切れもなくて、さと子さんは炭になってしまつて、固まっていました。あおむけで、真つ黒な両方の腕は空（くう）をつかんで挙げたまま。ちょうど赤ちゃんがニギニギをしる姿でした。焼け果てた眼窩にめり込んだ丸縁の度の強い眼鏡で、さと子さんとわかつたようでした。まだ幼なかつた僕は、どうしてこんなことになつてもうたのか、なにがなんだかわからなくなつてしまいました

広島市民は今年、平成十七年（二 五年）八月六日、原爆投下六十年忌を迎えます。

「ご縁あつてこの「おじさんの青春日記」にふれて頂いた国内外すべての読者の皆様に、「さと子さん」の生涯を周囲の方々に語り継いでいただくことをお願い申し上げます。

*

今年の「おじさんの青春日記」その9「は、私の父と母、そして太平洋戦争前後の出来事にふれた「聖徳太子立像」。

新春特別付録として「おじさんの青春日記」その5「で一部良識ある読者？から非難渦巻いたパロディ国語辞典シリーズの第二弾、「おじさん・おばさんの新国語辞典 バージョン2」四文字熟語の

巻』をお届けいたします。

昨年、あるコンピュータ関係の会社経営者から次のようなお便りを頂きました。

「 新作の原稿づくりに頑張っていたとき、私達おじさんの、『何か置き忘れた、忘れかけた、熱い血潮』のようなものを奮い起こして頂きたいと感じています。私に出来ることがあればお手伝いさせて頂きます。」。

このようなお便りにふれることが何よりの励みになります。

今年も多くの方々のご協力によって、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に

「おじさんの青春日記 その9」をお送り出来たことに感謝いたします。

ご健康をお祈り申し上げます。

里吉賢司

二 五年（平成十七年） 元旦